

## 家族・ふるさとへのあふれる愛情

橋爪上越市議著

## 『「五センチ」になった母』

醉山 省三(県社保協事務局長)

6月13日の「しんぶん赤旗」の「潮流欄」で紹介された随筆集『「五センチ」になった母』(同時代社出版、1000円)の著者である上越市の共産党議員・橋爪法一さんは、かつて私の新潟大学在学中の学生運動の仲間です。

橋爪さんは1972

年に大学を卒業。上越市に合併する前の故郷吉川町に帰り、歴史学科卒とは無関係の仕事に就きました。お父さんと一緒に「牛飼い」になったのです。そして町議7期を経て、合併後の市議選で一人区から見事に当選、昨年再選を果たしました。

政レポート」に書き続けた「随想」シリーズをまとめたものです。故郷のこと、家族のこと、牛飼いのこと等が普段着の言葉でつづられており、読みすすめるうちに橋爪さんの人柄と取り巻く雰囲気がいメージとなって浮かび上がってきます。

牛飼いのことでは、母牛が生まれて間もない仔牛の子育てを放棄し、母乳を飲めなくなつて危篤状態となつたその仔牛が、お父さんとの必至の世話で元気の回復した「母乳を飲めない仔牛」の話が目にとまりました。牛飼いの苦労と喜びを感じさせてもらいました。

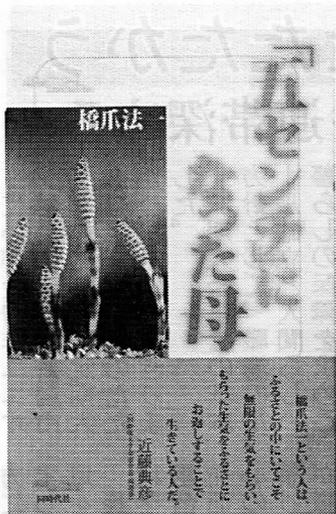
とききました。就職した次男に奥さんと一緒に温泉旅行に連れて行ってもらった話。「温泉に3回も入って、部屋では次男を真ん中に『川の字』になって眠りました。翌朝、一番早く起きた私、次男の寝顔を見ながら思いましました。ろくな子育てもしなかったのに、よくもまあ一人前の人間に成長してくれたものだ」と。私も年頃の娘を持つ親として少しばかりのうらやましさを含んで共感しました。

彼が「一人区」で当選し続けられるのは、随想が掲載された「市政レポート」が大きな力を発揮しているのだと、彼の2回の選挙応援から実感しました。

学生運動仲間の2人での応援活動は、雪の中を歩いて後援会員宅に1軒1軒「市政レポート」を配布することでした。全てのお宅で「こんな雪の中をご苦労さん」との声を聞きました。そこには「市政レポート」を待っている、橋爪さんがつづる「随想」を心待ちにしている大勢の地元の人達がいきました。「あっ、これが彼の勝利の源だ」と直感しました。

「五センチになった

母」とは、入院中の彼の父と母に対する表現です。「五センチ」の意味は是非本を買って、読んでご確認ください。



橋爪法一著『「五センチ」になった母』